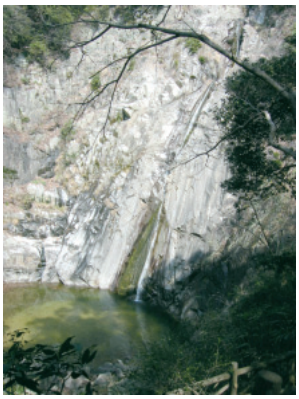
湯呑みの歌の謎

辻　憲男（文学部教授）

町の寿司屋へはいると、湯呑みに何やら文字が書いてある。たいていは「わたの原八十島（やそしま）かけて漕ぎいでぬと…」の歌であるが、寿司に夢中で、たいして気にも留めない。あれは何だろうか、と時々ふと思い出す。

桜を愛した在原業平（ありわらのなりひら）は、色好みの一代男であった。ある時芦屋の領地に来て、兄の行平（ゆきひら）や友人らと布引の滝を見に出かけた。何十メートルもの落差の滝は見たことがない。まるで岩に白絹をかけたよう。水が岩にぶつかって、ミカン大のしぶきを飛ばしている。感嘆して歌を詠んだ。いさり火の夜景も物めずらしく、海辺の別荘にもどると、ここの女主人がごちそうを用意して待っていた。さてそのふるまいの優美なことは、都の女性にも劣らぬほどであったとか…（『伊勢物語』）。業平は才がありながら出世を好まず、風流に遊び暮らした。不運の行平も、藻塩（もしお）垂れつつ須磨にわび住まいをした。歌や物語の主人公は、そういう自由人・アウトサイダーが多い。そこに本来の人間らしさがある、と言わんばかりだ。

「わたの原…」の歌は、小野篁（おののたかむら）が隠岐に流される時の悲憤がこもる。下の句が「人には告げよあまの釣り舟」なので、寿司に縁があるというわけだが、なんで寿司屋で、流人とつき合わないといけないのか。まさか、寿司をつまむ時も、人生の悲哀を思うべし、との諭しでもあるまいが。



布引の滝は王朝以来の観光名所。新幹線新神戸駅から山道を登る。